



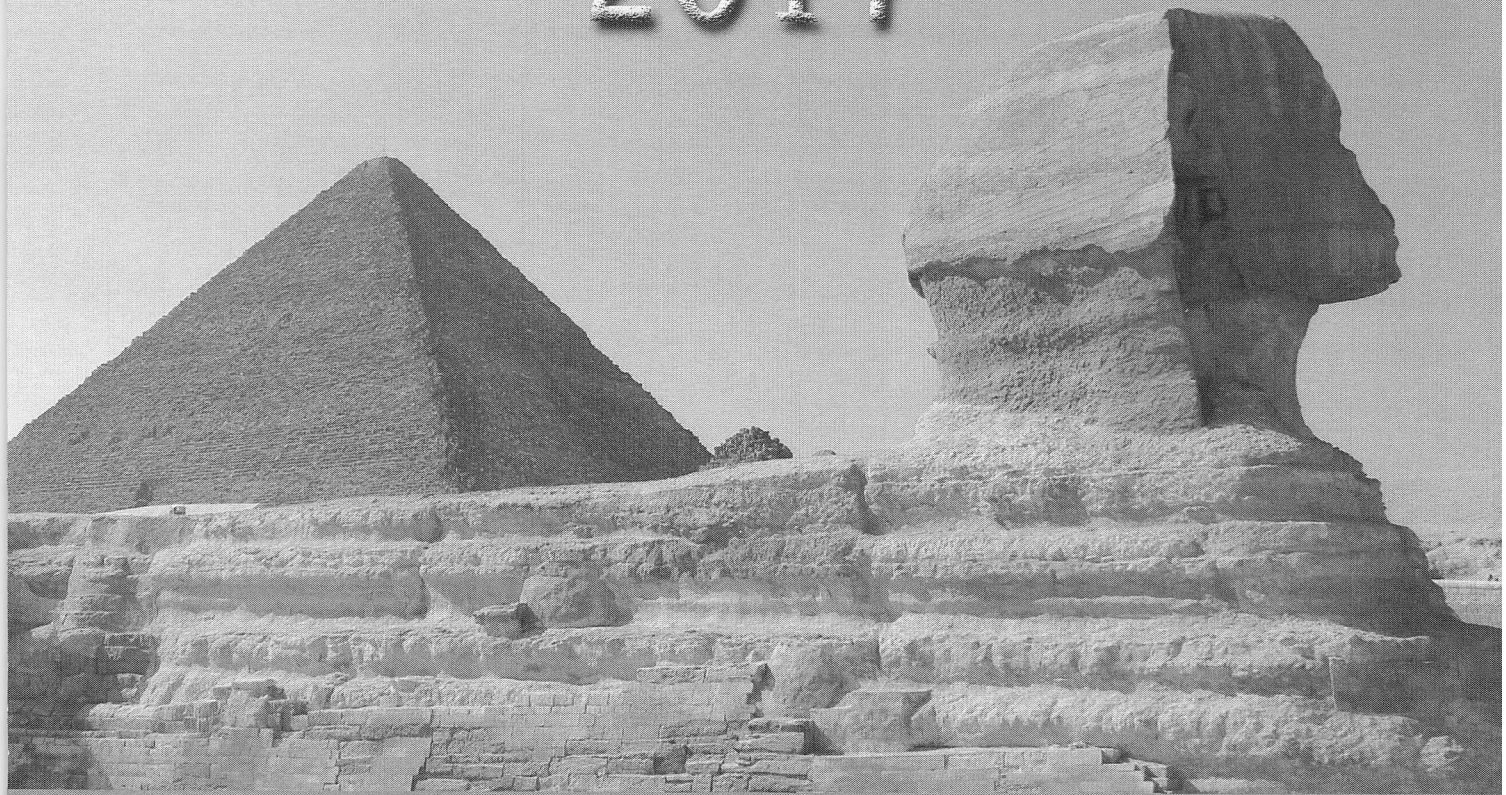
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

関西大学国際文化財・文化研究センター (CHC)

Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University



# エジプト学研究セミナー 2017



開催日時 : 2017年7月23日(日) 10:30~17:00

開催場所 : 関西大学 梅田キャンパス

KANDAI Me RISE 8Fホール ※千里山キャンパスではありません

## お問い合わせ先

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学 総合研究室棟2階 国際文化財・文化研究センター

E-mail : [chc-jim@ml.kandai.jp](mailto:chc-jim@ml.kandai.jp)

Tel : 06-6368-1111 (内線: 3242・3249) Fax : 06-6368-1457

HP : [www.kansai-u.ac.jp/chc/](http://www.kansai-u.ac.jp/chc/) Twitter: @CHC\_KU

Facebook : <https://www.facebook.com/Egypt.kansai.University>

**参加無料 先着100名**

**要事前申込 (7月14日締切)**

※申込方法の詳細は、裏面をご参照ください

## 【講演者紹介】

### 【田澤 恵子】

公益財団法人古代オリエント博物館研究員。筑波大学大学院修士課程地域研究研究科修了。英国・リヴァプール大学大学院博士課程考古学・古典学・エジプト学学科修了。Ph.D.。エジプト学を専門とし、古代エジプト人の宗教生活や思想及び心性を研究対象とする。

### 【吹田 浩】

関西大学文学部教授。カイロ大学考古学部にてPh.D.を取得。エジプト学を専門とし、文化史・宗教史の立場から古代エジプト史を研究している。2003年より、エジプト文化財の保存修復ミッションを主導。2013年に国際文化財・文化研究センターを設立し、同センター長を務める。

### 【河合 望】

金沢大学新学術創成研究機構准教授。早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学。ジョンス・ホプキンス大学大学院博士課程修了。Ph.D.。エジプト学を専門とし、特に新王国時代の歴史と考古学を研究。また、長年にわたりエジプト現地の発掘調査に従事している。

### 【藤井 信之】

関西大学国際文化財・文化研究センター非常勤研究員。関西学院大学大学院博士課程後期課程単位取得退学。関西学院大学大学院にて博士号(歴史学)を取得。エジプト学を専門とし、特にエジプトの第3中間期や後期王朝時代の歴史研究を進めている。

## 【講演プログラム】

- |             |                        |       |
|-------------|------------------------|-------|
| 10:30~10:40 | 開会のあいさつ                |       |
| 10:40~11:40 | 「古代エジプトにおける神・人・神話」     | 田澤 恵子 |
| 11:40~13:00 | 休憩                     |       |
| 13:00~14:00 | 「ピラミッド・テキストの研究」        | 吹田 浩  |
| 14:15~15:15 | 「新王国時代のメンフィスとその墓地について」 | 河合 望  |
| 15:30~16:30 | 「サイス王朝(第26王朝)時代のエジプト」  | 藤井 信之 |
| 16:30~16:50 | 質問コーナー                 |       |
| 16:50~17:00 | 閉会のあいさつ                |       |

## ＜申込方法＞

参加を希望される方は件名を「エジプト学研究セミナー 2017」とし、①氏名(漢字・ふりがな)②連絡先(住所・電話番号・Eメールアドレス)③所属先(勤務先もしくは学校名)を明記のうえ、EメールもしくはFaxにて下記の申込先までご連絡ください。  
※個人情報(本セミナーおよびセンターの活動のご案内)のみ使用させていただきます。

2017年7月14日(金)締切

※定員に達し次第、締め切らせていただく場合がございます。

## ＜申込先＞

関西大学国際文化財・文化研究センター

Email: chc-jim@ml.kandai.jp

Fax: 06-6368-1457



関西大学 梅田キャンパス交通案内  
阪急「梅田駅」茶屋町側から徒歩5分  
JR「大阪駅」から徒歩10分



文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業  
関西大学国際文化財・文化研究センター (CHC)

Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University

# エジプト学研究セミナー 2017

## 要旨集

2017年7月23日(日)  
10:30~17:00

関西大学 梅田キャンパス  
KANDAI Me RISE 8F ホール

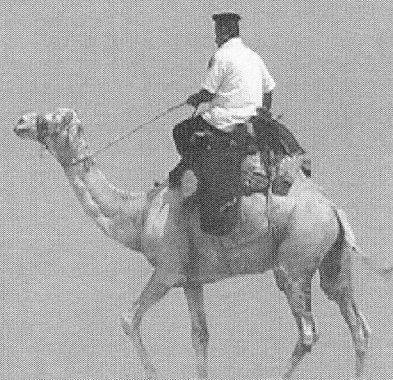
描画 加藤一朗

## 開催主旨

日本では、毎年のように古代エジプトに焦点をあてた展覧会が催されるなど、多くの方が古代エジプト文明に関心を寄せています。しかし、その関心の高さに反して、本格的にエジプト学を学びたい方を対象とするセミナーや講演会はそれほど多くはありません。そのような背景から、関西大学国際文化財・文化研究センター（CHC）では、2016年7月に日本のエジプト学研究の第一線でご活躍されている研究者をお招きし、「エジプト学研究セミナー」を開催し、ご好評を頂きました。そしてこの度、その続編となる「エジプト学研究セミナー 2017」を開催する運びとなりました。

本セミナーでは、古代オリエント博物館の田澤恵子先生、金沢大学新学術創成研究機構の河合望先生、そして当センターから吹田浩センター長と藤井信之研究員にご登壇頂き、古代エジプトの歴史や文化に関する研究を専門的な視点からお話していただきます。

本セミナーが古代エジプトに強い関心をお持ちの方々や、これから研究を始めようとする若い学生にとって有意義な機会となることを期待しています。



## 講演プログラム

- |             |                        |       |
|-------------|------------------------|-------|
| 10:30~10:40 | 開会のあいさつ                |       |
| 10:40~11:40 | 「古代エジプトにおける神・人・神話」     | 田澤 恵子 |
| 11:40~13:00 | 休憩                     |       |
| 13:00~14:00 | 「ピラミッド・テキストの研究」        | 吹田 浩  |
| 14:15~15:15 | 「新王国時代のメンフィスとその墓地について」 | 河合 望  |
| 15:30~16:30 | 「サイス王朝（第26王朝）時代のエジプト」  | 藤井 信之 |
| 16:30~16:50 | 質問コーナー                 |       |
| 16:50~17:00 | 閉会のあいさつ                |       |

# 古代エジプトにおける神・人・神話

田澤 恵子

古代エジプトは、その長い歴史の中で多くの神々の物語を残しました。しかしながら、それらを整理・体系化した一貫性のある神話・伝説集のようなものは確認されていません。この世の始まり（創世神話）や人類の起源（人類誕生神話）など、古代エジプト人のアイデンティティに関わるような事柄については、複数のエピソード（神話）が残されています。そこで研究者たちは、葬祭文書、呪術文書、神々への賛歌や祈祷文、文学作品、歴史文書などの文字資料、そして、彫像、神殿レリーフ、墓壁画、葬祭文書の挿絵などの図像資料から断片的に神々の属性や権能を整理し、それぞれの神がどのように関係しあっているか（親子、兄弟姉妹、夫婦など）を検証することで神々の物語（神話）を編み、古代エジプト人と神々の関係性について研究を重ねてきました。

本セミナーにおいては、まずは、そのようなこれまでの研究成果に基づき、キーワードを幾つか設定（(1) 儀礼、(2) 二元論、(3) 図像表現、(4) 実用主義、(5) 互惠的貢納関係、(6) 死者と神、(7) 聖獣と動物信仰、(8) 習合）して、古代エジプト人と神々との関係性について整理します。

続いては、古代エジプト人が自分たち固有の神ではなく、外来の神々との接触を余儀なくされた時にこれらの関係性がどのように変化したのか、あるいはしなかったのかということについて検証し、総じて古代エジプト社会において神々がどのように存在していたのかを考えます。数多の神々が存在していた古代エジプトでは、外来の神々も信仰の対象にされていました。特に、新王国時代（前16 - 11世紀）に崇拝されたシリア・パレスティナ起源の六柱の神々（バアル、レシェフ、ハウロン、アナト、アシュタルテ、ケデシェト）の存在は顕著です。彼らがどのように受容され、存在していたのか、「比較」と「翻訳」を更なるキーワードに設定して読み解きながら、古代エジプト人と神々の関係性について一つの見解を示します。

そして、現代社会において確認できる古代エジプトの神々の「遺産」についても考えます。

## 【田澤 恵子】

公益財団法人古代オリエント博物館研究員。筑波大学大学院修士課程地域研究研究科修了。英国・リヴァプール大学大学院博士課程考古学・古典学・エジプト学学科修了。Ph.D. エジプト学を専門とし、古代エジプト人の宗教生活や思想及び心性を研究対象とする。

# ピラミッド・テキストの研究

吹田 浩

古代エジプトの文書の読解は、表記法が不完全であることから、研究者によって解釈や翻訳が異なるのが通常である。古代エジプト語の文法でさえ、いまだに不確かであり、理論が大きく変わることがあるのが現状である。そのため、研究者の解釈の余地が比較的大きく、読解の際には、先行研究の解釈を検証したうえで読む必要がある。

今回は、古王国時代のピラミッド・テキストから、「共食い賛歌」(Cannibal Hymn)と呼ばれる呪文第 273 - 274 番を取り上げて考えてみたい。亡くなった王が神々や人間を食べて、彼らの力を奪うという内容を持つものである。このような内容の呪文は、ピラミッド・テキストの中でも異例であり、古い伝承を反映したものと考えられている。

ピラミッド・テキストが書かれた古期エジプト語は、「古典語」と呼ばれる中期エジプト語と比べて表記が完成していない。また、内容が宗教的であることから難解である。

ピラミッド・テキストを研究する際の標準作品は、当時の知られていたピラミッド・テキストの集成である Kurt Sethe, *Die altägyptischen Pyramidentexte*, 4 Vols. Leipzig, 1908 - 22 と、その翻訳と解説である Kurt Sethe, *Übersetzung und Kommentar zu den altägyptischen Pyramidentexten*, 6 Vols, Hamburg, 1935 - 1962 である。これらは、今日に至るまでピラミッド・テキストの研究で欠くことのできない文献になっている。その後、Samuel A. B. Mercer, *The Pyramid Texts in Translation and Commentary*, 4 Vols, New York, 1952、Alexandre Piankoff, *The Pyramid of Unas*, Princeton, 1968、Raymond O. Faulkner, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, 2 Vols, Oxford, 1969 と続く。

今世紀に入って、ピラミッドの・テキストの研究は新たな段階に入ったように思われる。まず、Claude Carrier, *Textes des pyramides de l'Égypte ancienne, Tome 1: Textes des pyramides d'Ounas de Têti*, Paris, 2009 のようにピラミッドごとに新しい翻訳を行っているものが出版された。これに加えて、呪文の新しい解釈のみならず、呪文の配置など含めて大幅な変更を加えた James P. Allen, *The Ancient Egyptian Pyramid Texts*, Leiden, 2005 が出ている。後者の著者アレンは、今年になって、*A Grammar of the Ancient Egyptian Pyramid Texts: Unis*, Winona Lake, 2017 を出版し、文法理論も従来のものから大幅に変えている。

今回は、「共食い賛歌」を例にして、エジプト学者がどのようにテキストを解釈しているのかを考えてみたい。

## 【吹田 浩】

関西大学文学部教授。カイロ大学考古学部にて Ph.D を取得。エジプト学を専門とし、文化史・宗教史の立場から古代エジプト史を研究している。2003 年より、エジプト文化財の保存修復ミッションを主導。2013 年に国際文化財・文化研究センターを設立し、同センター長を務める。

# 新王国時代のメンフィスとその墓地について

河合 望

新王国時代（前 1550 年頃～ 1069 年頃）の墓地については、テーベの西岸に位置するネクロポリスが良く知られている。このテーベのネクロポリスには新王国時代の歴代の王墓が造営された「王家の谷」が位置し、王の葬祭殿が低位砂漠の耕地に接する縁辺部の南北にわたって建設された。そして、葬祭殿の背後には当時の高官の墓が累々と営まれた。一方、北の都メンフィスの新王国時代の墓地については、20 世紀の末になってようやくサッカラ遺跡やダハシュール北遺跡などにおいてその様相が明らかになりつつある。

特にサッカラ遺跡では、ウナス王のピラミッド参道の南側で第 18 王朝末のトウトアंकアメン王時代の高官ホルエムヘブ、マヤラの墓が発見され、その隣接する北東部からはラメセス 2 世の宰相ネフェルレンペトらの高官墓が発見された。また、サッカラ台地の東側に位置するバステト女神の聖猫の墓地ブバステイオンでは、アメンヘテプ 3 世の治世の宰相アペルエル（アペリア）、トウトアंकアメン王の乳母マヤ、ラメセス 2 世時代の外交官ネチエルウイメスらの墓が発見された。テティ王のピラミッドの周辺には新王国時代の墓が多数存在することが知られている。さらに、現在のアブ・シール村に隣接する北サッカラの台地の東側の崖下にはラメセス 2 世時代の高官ナクトミンらの墓が確認されており、日本隊が調査を行っているアブ・シール南丘陵遺跡頂部ではラメセス 2 世の王子カエムワセトの娘とみられるイシスネフェルトの墓が発見された。しかし、サッカラの新王国時代の墓地については、欧米の博物館、美術館に收藏されている膨大な数の記念物、副葬品などの遺物の本来の出土地が不明であることから依然として未発見の場所が存在すると考えられる。このようにテーベの新王国時代の墓地の研究に比して、サッカラの新王国時代の墓地の研究は立ち遅れており、これまでの新王国時代の研究がテーベ出土の資料に偏重している状況があった。このような問題提起から 2015 年度から科学研究費補助金基盤研究（B）（海外学術調査）による「エジプト、サッカラにおける新王国時代の墓の調査研究」（研究代表者：河合望）を開始した。2016 年 5 月に実施した踏査では、テティ王のピラミッドの北西に位置する舌状の丘陵に約 10 万㎡の規模にわたって新たな新王国時代の墓地の存在が明らかとなった。

本発表では、新しい調査の結果を受けて、新王国時代のメンフィスの墓地の形成と分布について考えてみたい。

## 【河合 望】

金沢大学新学術創成研究機構准教授。早稲田大学大学院文学研究科博士課程満期退学。ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了。Ph.D. エジプト学を専門とし、特に新王国時代の歴史と考古学を研究。また、長年にわたりエジプト現地の発掘調査に従事している。

# サイス王朝（第26王朝）時代のエジプト

藤井 信之

本講演で取り上げるエジプト第26王朝（前664年～前525年頃）は、その発祥地に因んでサイス王朝（あるいはサイス朝）とも呼ばれている。このサイス王朝について、我が国では詳しく知る機会がほとんどないと思われる。高等学校の「世界史B」の教科書では、アッシリア帝国崩壊後にオリエント世界に成立した4国の中の一つとして登場する。すなわち新バビロニア、リュディア、メディアと並び当時の列強の一角を占めたエジプトである。しかし新バビロニアのネブカドネツアル2世がエルサレムを陥落させ住民をバビロンへ強制移住させたこと、リュディアが貨幣を発行したこと、メディアから次の時代を担うアケメネス朝ペルシアが現れたことなどが記される一方で、エジプトについてはそのアケメネス朝に滅ぼされたことが記されるだけで、当時のエジプトについての記述は全く見られない。学問の世界を見渡しても、我が国ではこの時代に関する専門論考は皆無に等しいし、エジプト史の通史でも簡単に触れられるだけである。そこで本セミナーでは、サイス王朝の歴史を最近のエジプト学における研究成果を踏まえながら紹介するとともに、この時代がエジプト史の一つ大きな転機であったことを明らかにしたいと考えている。

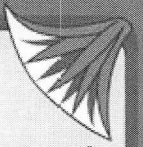
エジプト学では、サイス王朝は後期王朝時代(Late Period 第25王朝～第31王朝)に時代区分され、新王国後の前1千年紀における繁栄期の一つと目されている。とはいえ、新王国後のエジプトは長い衰退期にあったとも考えられていることから、長いエジプト史全体の中では、繁栄期としてそれほど強調されているわけでもない。それは4国分立時代において最も強勢を誇ったのは新バビロニアだと認識されていることによるとと思われる。エジプトは新バビロニアに対してそれほど劣勢だったのか、本講演ではこの点も少し再考してみたいと思う。

サイス王朝に対する評価は、古代から伝わる著作においても一定していない。旧約聖書では、サイス王朝時代のエジプトを頼りにならない老大国として「折れた葦」と表現している（「イザヤ書」、「列王記下」、「エゼキエル書」など）。また「エゼキエル書」には、新バビロニアのネブカドネツアル2世がエジプトを征服するという予言まで記されている（もちろん実現しなかった）。ところが歴史の父ともいわれるヘロドトスは、その著書『歴史』の中で、「エジプトはアマシス王の治世下に、空前の繁栄を示したといわれる」（『歴史』巻2：177, 松平千秋訳）と記し、この時代のエジプトが繁栄していたことを伝えている（アマシス王とは、サイス朝第5代のアアフメス2世のことである）。このようにサイス王朝の評価は、古代から一定していなかった。なぜ古代の著作においてサイス朝の評価は割れているのか、本講演ではこの点にも留意しながら、サイス王朝の興亡を見ていくことにしたい。

## 【藤井 信之】

関西大学国際文化財・文化研究センター非常勤研究員。関西学院大学大学院博士課程後期課程単位取得退学。関西学院大学大学院にて博士号（歴史学）を取得。エジプト学を専門とし、特にエジプトの第3中間期や後期王朝時代の歴史研究を進めている。





## 関西大学国際文化財・文化研究センター

「国際文化財・文化研究センター」(Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, CHC) は、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「国際的な文化財活用方法の総合的研究」の助成を受け、平成 23 年度(2013 年度)に関西大学に設立されました。

当センターには、エジプト学、現代エジプト研究、文化財保存修復、異文化研究などを専門とする人文系研究者、そして、地盤・建築工学、分析化学、微生物学、高分子化学、マルチメディア工学などを専門とする理工系研究者が所属し、(1) エジプト学・エジプト社会グループ、(2) 文化財修復グループ、(3) 国際文化グループ、(4) 科学技術グループの四つのグループが共同しながら、文化財の保全と活用に向けた文理融合型の国際的な研究を推進しています。また、文化財をテーマとしたシンポジウムやセミナーを主催し、社会への教育普及活動や若手研究者の育成にも取り組んでいます。本セミナーも、その一環として企画致しました。

当センターでは、今後も「中期エジプト語講座 中級」(2017 年 11 月予定)、「平成 29 年度 文化財保存修復セミナー」(2018 年 2 月予定)の開催を予定しています。また、五ヶ年事業の最終年度にあたる今年度中に、事業全体の最終成果をご報告する場を設けたいと考えております。詳細につきましては、当センターの HP 等を通して、順次発信して参りますので、ご関心のある方は、是非ご参加ください。



発行日：2017年7月23日

発行：関西大学国際文化財・文化研究センター

〒564-8680

大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel：06-6368-1456 Fax：06-6368-1457

HP：<http://www.kansai-u.ac.jp/chc/> Twitter：@CHC\_KU

Facebook：<https://www.facebook.com/Egypt.Kansai.University>

